



Title	高等学校の避難訓練：目標が見失われ、形骸化した避難訓練の課題に向き合う
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2025
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101254
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和6年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	せと ゆうや 瀬戸優矢	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	1 年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	みやもと たくみ 宮本 匠	所属	人間科学研究科		
研究課題名	高等学校の避難訓練：目標が見失われ、形骸化した避難訓練の課題に向き合う				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1. 研究背景・目的

近年、自然災害による被害は後を絶たず、防災・減災教育の重要性が増している。和歌山県教育委員会が公表している事例集⁽¹⁾では、より実践に即した防災・減災教育の取り組みが紹介されている。しかし、兵庫県教育委員会による調査⁽²⁾から、小学校や中学校と比較して、高等学校の方がより時間の確保に課題があることも指摘されている。また、高等学校における防災教育は、主に学校行事などの特別活動の時間で取り組まれており、小中学校よりも避難訓練の予定を生徒に伝えず実施している学校の割合は少ないことが読み取れる。これは、多くの高等学校が防災学習の日を予め設定し、その日に避難訓練と防災教育を行っているためだと考えられる。神戸新聞⁽³⁾でも大木聖子教授が指摘しているように、形骸化した年2～3回の避難訓練は、本当に生徒や教職員の役に立っているのだろうか。助けられる側から助ける側へと成長していく高校生にとって、必要な避難訓練とはどのようなものだろうか。以上のリサーチクエストより、形骸化した避難訓練の課題解決のために本研究を実施した。そして、本研究により「避難訓練の課題に向き合うこと」の大切さを示し、「課題解決に向けた取り組み」の一例を発信することで、自らの学校においても試してみようとする生徒や教職員の方が増えれば、各校の実情に合わせたより最適な避難訓練の実現に繋がることを期待できる。

2. 研究計画

本研究では、兵庫県立神戸甲北高等学校をフィールドとして、高等学校における避難訓練の課題を見つめ直し、解決策を考察することを目的に、アクションリサーチを行った。神戸甲北高校は総合学科をもち、クラス単位で受ける授業は少ない。本研究では7月と12月に行われる避難訓練をターゲットとし、避難訓練を企画実施する総務部の防災・人権教育担当の教員と共に、これまでの訓練の見直しを行った。さらに、9月には高知県黒潮町及び四万十町で、南海トラフ巨大地震に備えて人々が行っている取り組みについて視察した。コミュニティの相違点や人々の防災に対する意識の違いを踏まえた上で、高知県での取り組みの中で神戸甲北高校においても生かせることを考えた。

3. 1. 研究経過・成果（7 月の避難訓練）

神戸甲北高校での令和 6 年度初めての避難訓練は 7 月に実施された。訓練に先立ち、各クラスで「学校の体育館が避難所となった場合どのように空間を活用するか」という題でグループワークを行っていた。また、次項で考察するアンケート調査も避難訓練の前に実施した。

7 月の避難訓練では、教職員間の情報共有と余震を主なテーマとした。ホームルーム教室で授業中に地震及び数分後に余震が発生し、放送機材が使えない状況で点呼を取り本部のある職員室で情報を集約するという想定とした。他にも、負傷している生徒や行方不明の生徒がいるということも盛り込み、教職員間での適切な情報共有を必要とする訓練とした。

訓練中には多くの課題が出てきた。一点目は情報伝達である。職員室に設置された本部では重複や記録不足などが見られた。また、教室と本部の間での情報伝達も不十分であった。今回のテーマの一つであったが、次回への課題にもなった。二点目は生徒の避難行動が十分に取れていなかったことである。緊急地震速報の放送は鳴っていたが、机の下にもぐるなどの行動を取れていないクラスもあった。三点目は教員の行動が分かりにくかったことである。ほとんどの教職員は詳細を知らないまま訓練に参加したため、行動に戸惑っていた。しかし、実際の災害時にはその場で判断することが求められるため、この形式も一定の効果があるだろう。これらの課題は訓練中から実感されていた先生もあり、ある先生は「どうしていい分からへんけど、やってみんとやな」と仰っていた。先生方にとっても初めてのことが多く、学びになっている様子が見られた。

また担任の先生方は訓練の一環として「救助袋」を設置した。これも多くの先生方が初めてだったようであり、設置に苦労する様子が見られた。事後の振り返りでは救助袋を設置するよりは、階段から避難させる方が安全かつスムーズなのではないかという意見もあった。火災等により階段が使えない場合は救助袋が有効であるが、そうでなければ救助袋は必要がないということに、学校の構造や生徒の特徴を理解されている先生方だからこそ気づけたのだろう。そして、この気づきは救助袋を設置するというワクワク感も含んだ体験により導き出されたものであったはずだ。

7 月の避難訓練では他にも多くの課題が見出された。訓練後に担当教員と話し合った中では、教職員間の情報共有の方法、生徒の動きが少なかったことが反省点として挙げられた。実際に避難訓練後に 4 人の生徒にインタビューを行った際にも、「先生が頑張っている様子は今までより伝わってきたけど、私たちは何もすることがなかった」という意見をいただいた。これらを踏まえ、12 月の避難訓練では生徒の動きも含めて計画を立てることにした。

3. 2. 研究経過・成果（神戸甲北高校アンケート調査）

先述の通り、7 月の避難訓練に先立ち、全校生徒を対象にアンケートを実施した。アンケート項目と全体結果については、巻末の資料及び表に記載している。ここでは、今後の避難訓練に生かすことができる主な結果について考察する。

質問 4. 「学校で行う避難訓練は大切である」に対して「そう思う」と答えた生徒は約 74%、「ややそう思う」と答えた生徒も合わせると、約 97%であり、神戸甲北高校の生徒が避難訓練に対してプラスイメージを持っていることが分かる。ただ、質問 10. 「避難訓練の回数はどうすべきだと感じていますか」に対しては「そのまま(年 2 回)でよい」と答えた生徒が約 74%であり、回数を増やすことを生徒が望んでいないことが分かった。回数を増やすのではなく、1 回ごとの質を高めていくことが生徒にとっては望ましいのだろう。時間の確保という教員側からの視点でも、回数を増やすことは難しいため、内容に拘る必要があると分かる。そして注目すべきは、質問 14. 「防災を担うべき人は次

のうち誰だと思いますか」への回答に、先生・保護者・自分たちを選択肢として用意したところ、約89%の生徒が「自分たち」を選択した。自ら防災の主体になろうという意識が少しでもあることを示唆している結果だと考えられる。今後の訓練内容の参考になるだろう。

3.3. 研究経過・成果（高知県黒潮町及び四万十町への視察）

9月に高知県黒潮町及び四万十町において、大方児童館の避難訓練、興津ぼうさいミュージアムの見学、黒潮町佐賀地区の津波避難タワーの見学などを実施した。南海トラフ巨大地震により巨大津波が押し寄せるとされている地域の暮らしの中には防災がとけ込んでいると感じた。児童館に通う小学生が楽しそうに避難訓練を行う様子、小中学生が考えた防災減災対策が形になっている興津、町の各所に建てられた津波避難タワーが住民たちの散歩先など兵庫県では見られないことが多くあった。

その中で、本研究を行うにあたり重要になるであろうことを二つ得た。一点目は、想像力を鍛えることである。実際に災害が起こるまでは、実際の被害を知ることはできない。しかし、高知の人々は様々な視点を持ち、必要な対策や行動を考えてきた、そして考えていることを実感した。子ども独自の視点から町の防災を考えたり、役場からの支援では足りない物資を自主的に想像して追加したりする姿にそれが表れていると思う。神戸甲北高校での災害リスクは高知とは異なるが、今ある想定に拘らず、教員も生徒も想像力を働かせていくべきだろう。二点目は、大人が訓練や防災を前向きに捉えることだ。高知の人々は常に地震・津波の危機と隣り合わせであるが、決して悲観的になることなく、防災・減災のために取り組んできたことを児童館の職員さんやタワーを説明して下さった地区長さんから学んだ。そして、この姿勢は子どもにも受け継がれているのではないかと感じた。神戸甲北高校においても、先生自身が避難訓練を面倒なものだと思わず、訓練に進んで向き合うことが生徒も巻き込んで防災意識を高めるために大切なことだと考えた。

また、別に高知県立窪川高等学校の教職員の方にご協力いただき、高校の避難訓練の様子を見させていただいた。高知県では南海トラフ巨大地震などの被害が大きいことが予想されるため、生徒も真面目に取り組んでおり、先生方も避難訓練をポジティブに捉えられているように感じた。また、町の防災担当者からの実用的な講話が行われていたことも印象的だった。学校だけで完結させるのではなく、地域との繋がりを持つことは取り入れていきたい工夫であると思った。高知県での視察から得たこととして、大人側が積極的に訓練等に取り組むこと、そしてそれが子どもへと波及していくのではないかと仮説を、神戸甲北高校の避難訓練へ生かし、今後も検証したいと考えた。

3.4. 研究経過・成果（12月の避難訓練）

12月の避難訓練は前回の反省から、生徒の動きと、教職員間の情報共有をテーマとして実施することになった。そこで、生徒が授業教室から避難場所まで移動するという過程を作るために、地震が起き、その数分後に余震とそれにより火災が起きる想定とした。最初の地震発生から火災発生の放送までは約10分の時間があつた。また、前回はホームルームごとに点呼が行われていたが、12月の避難訓練では授業中の発災を想定し、各教室へ生徒が分かれている状況をスタートにした。さらに、前回と同様に負傷生徒や行方不明の生徒を設定し、火災が起きた場所近くの防火戸は閉じて実施した。

12月の避難訓練の振り返りでは、「主体的に取り組んでくれる先生が増えた」という良かった点が挙げられた。事前説明として「火災が起きるがどこから起きるかは当日知らせる」と職員会議で伝えたところ、「場所によって色々シミュレーションしないといけないな」と言った先生がいたそう。また、防火戸を閉じて訓練を行ったことはよかっただろうという意見も出てきた。実際に生徒は「え？これなんなん？」と言いつつも、先生の誘導により適切に避難することができていた。新たな発見と

経験をすることができたと考えられ、実際の状況に近い訓練として効果があったと思われる。

一方で多くの反省点も挙げられた。一点目は本部の動きが不明確かつ現場とズレがあるという点である。学校という限られた区域内であっても、全体を把握することは難しく、本部と各教室との連携が十分にできなかった。また、火災発生後に体育館へ指示するようにという放送があったが、本部が職員室から移動していなかった。二点目は火災が起きたという情報が適切に伝わっていなかったことだ。火災時の緊急放送は廊下のみに流れるため、聞き取るために教室の扉を開け、隣の教室と情報を共有し合う必要がある。この情報共有が上手くできた階では避難開始が早かったと担当教員から報告していただいたが、逆に放送を正確に聞き取れなかった教室では周りの様子を伺いながらの避難となっていた。緊急放送が廊下のみに流れる理由や他校ではどうなのかは今後確認していく。三点目は、避難する際に教室の扉や窓を開けている教室と閉めている教室の両方があったことだ。訓練後の消防局からの助言により、火災の際は扉を閉めて避難することが正しいと再確認することができた。今後の訓練では各教職員へこのことを伝えた上で避難することを徹底していかなければならない。

7月の避難訓練では「救助袋」12月の避難訓練では「防火戸」を使用した。これは訓練を企画実施する担当教員にとって訓練を楽しむ要素となった。しかし、学校の教員だけでは分からないことも多く、消防局の方に教えていただいたり、説明書を読んだりした。時間はかかるため大変だが、それ以上に楽しんで訓練の準備を行うきっかけとなったことは大きいだろう。担当の先生も「こんなあったんや」と何度も仰っていた。学校には生徒を守るために多くの設備が設置されており、毎年点検はされているが、先生方は知らないまま使わないまま放置されている設備が多いのだろう。他校においても、今ある設備を実際に試してみることに、担当教員が避難訓練に前向きに取り組めるきっかけがあるのかもしれない。そして、生徒や他の教職員へと波及していくことで学校全体として防災意識が高まっていくことが期待できるだろう。

3.5. 研究経過・成果（協力を得られなかったある高校）

別の視点として協力を得られなかったある高等学校についても考察をしたい。本研究がアクションリサーチという方法をとっていることから、協力を得られない可能性があることは当然である。しかし、協力を得られなかったことにも大切な意味があるだろう。実際の高校名を示すことはできないため、詳細を記述することはできないが、協力を依頼した高校は、標高が低い場所にあり、様々な災害のリスクが考えられる学校だ。そのため、これまでの複数の災害を想定して訓練が行われてきており、訓練の内容としては充実していたと考えられる。しかし、例年の踏襲で訓練が行われていたため、さらによい方向へ変化していくことが可能ではないかと考えていた。ただ、複雑な想定を伴う避難訓練を行った際に生徒の安全を確保できない可能性があることや、非常勤の教員が多いため教員への負担を増やしたくないという理由で協力を得ることができなかった。

この二つの理由は避難訓練の在り方にも関わってくる問題なのではないだろうか。まず複雑な避難訓練により生徒の安全を確保できないという点については、その高校には避難をするにあたり支援を必要とする生徒が含まれるからということであった。もちろん他の教育活動とのバランスを考えると、避難訓練そのものに多くの時間を割くことはできず、生徒がスムーズに避難できる想定の方が望ましい。しかし、本当にそれでよいのだろうか。それが避難訓練と言えるのだろうか。避難訓練に効率や実施のしやすさを求めるべきではないことは明らかである。時間さえ確保できればこのことに気づき、訓練をさらに実りのあるものにすることができると思うが、現場の教員にはその余裕がないのが現状なのかもしれない。次に、非常勤の教員が多いという点についてである。この課題は、神戸甲北高校も同じである。では、非常勤の教員が授業をしている際には災害が起こらないと言えるのだら

うか。もちろん、そうは言えない。災害はいつ起きるか分からないのであり、だからこそ日頃からの訓練も大切にしなければならないのである。神戸甲北高校では12月の避難訓練では非常勤の教員も含めて避難訓練が行われていたが、担当教員は「非常勤の先生方にも入っていただけてよかった」と仰っていた。普段は非常勤の先生方も学校にいらっしゃるため、日常に近い形で行えたことを評価されており、非常勤の教員を包摂する訓練の重要性を認識した。各学校によって事情は異なることが予想されるが、全教職員を対象とした訓練も今後実施していく必要があるだろう。

しかし、これらの実現には、学校内からの力だけでは足りない可能性があり、専門家をはじめとする学校外からのサポートも必要となると思う。教育委員会などにそのような機関を設置することや地域の自主防災組織と連携することなどを推進していくとよいと考えられる。協力を得られなかったことを考察することで、その奥に隠れている高校の課題を推察できた。忙しい中、協力の可否について調整してくださった先生方にも感謝申し上げたい。

4. 考察

2回の避難訓練と高知への視察などを通して、避難訓練を実施するにあたり、大人や先生が楽しむことが大切だろうと考えた。神戸甲北高校では、救助袋や防火戸がワクワク感を生み出すことに繋がっていたと思う。ここでの「楽しむ」とは、避難訓練を楽観視するということではなく、避難訓練の準備段階から興味や好奇心を持って取り組めるようにするということである。そして大人や先生たちが楽しく、真剣に避難訓練と向き合う姿勢が子どもたちにも伝わることで、形骸化した避難訓練の克服に繋がるのではないだろうか。また、「救助袋」や「防火戸」のように新たな道具を取り入れることで、私自身も、先生や生徒も新たな知識を得ることができた。本研究のリサーチクエストである、形骸化した年2～3回の避難訓練は、本当に生徒や教職員の役に立っているのだろうか、助けられる側から助ける側へと成長していく高校生にとって、必要な避難訓練とはどのようなものだろうかという問いに対しての一つの答えが、避難訓練を「楽しむ」ことだと考える。

ただし、学校現場は避難訓練のみに多くの時間を割くことはできない。時間が足りないという課題の解決は今後も向き合わなければならない。加えて、今回実施した避難訓練は持続可能性が低いのではないかと危惧される。今回の様々な想定を取り入れた、より実践的な避難訓練は担当教員のやる気に大きく依存している。訓練を「楽しむ」ことでやる気が引き出される可能性はあるが、これに頼りすぎることもよくないだろう。防災に積極的に取り組んでいる地域の人や防災に興味を持っている高校生を軸として、訓練を行う仕組みを作るなどで、持続可能性に対応できるかもしれないが、今後の検証が必要であるだろう。

5. 今後の展望

12月の避難訓練で新たに出てきた課題は来年度以降継続して解決していかなければならない。そして、避難訓練に関係する時間を十分に取れていないことは先述の通り大きな課題である。しかし、「教員側としても避難訓練がこのままではいけないという思いはある」と仰っており、より実践的な避難訓練を継続して模索していくべきだと私は思っている。一つの手段として、地域の防災組織や消防局、そして専門家や研究者との連携は必要であると考えられる。考察でも指摘したが、持続可能性という新たな課題については今後さらなる研究、検証をしていきたい。

6. 謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方にご協力いただきました。研究の全体について助言くださったア

ドバイザー教員の宮本匠准教授、高知県での視察を案内して下さった京都大学防災研究所の岡田夏美特任助教と大学院生の皆様、学校での避難訓練の様子を見させて下さった高知県立窪川高等学校の教職員の皆様、そしてメインフィールドとして本研究に協力して下さった兵庫県立神戸甲北高等学校の教職員の皆様、生徒の皆様。多くの方にご協力いただき、本研究を実施することができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【参考文献】

- (1) 和歌山県教育委員会. 高校生防災スクール～各校の取組を紹介～平成28年度版, 2017

<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/todoufukuken/data/30wakayama/30-04-h28.pdf>

(最終閲覧日：2024年12月20日)

- (2) 兵庫県教育委員会. 防災教育に関する実態調査集計(令和5年度), 2024

<https://www2.hyogo-c.ed.jp/hpe/uploads/sites/3/2024/03/%E4%BB%A4%E5%92%8C%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E9%98%B2%E7%81%BD%E6%95%99%E8%82%B2%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E9%9B%86%E8%A8%88.pdf>

(最終閲覧日：2024年12月20日)

- (3) 神戸新聞社. 防災教育の現在地(上)旧態依然 訓練やったふり、やめませんか, 2023

<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202301/0015955631.shtml>

(最終閲覧日：2024年12月20日)

【資料—神戸甲北高等学校で実施したアンケート項目】

質問 1. あなたは何年生ですか。該当する選択肢に○をつけてください。

1年生 ・ 2年生 ・ 3年生

質問 2. 居住地域を教えてください。(神戸市○○区など)

質問 3. 小中学校では1年に1回以上避難訓練がありましたか。(該当するものに○)

あった ・ なかった ・ 覚えていない

質問 4. 学校で行う避難訓練は大切である。(該当するものに○)

そう思う ・ ややそう思う ・ あまりそう思わない ・ そう思わない

質問 5. 高校生になって防災学習を行う機会は増えましたか。(該当するものに○)

増えた ・ 減った ・ 分からない

質問 6. 甲北高校の避難経路を知っていますか。(該当するものに○)

知っている ・ 知らない

質問 7. 今「地震」が起きた場合、どのように行動すればよいか分かりますか。(該当するものに○)

分かる ・ 分からない

質問 8. 今「火災」が発生した場合、どのように行動すればよいか分かりますか。(該当するものに○)

分かる ・ 分からない

質問 9. 避難訓練に対するイメージはどれが当てはまりますか。(最も当てはまるものに○)

楽しい ・ 学びになる ・ つまらない ・ 面倒だ

質問 10. 避難訓練の回数はどうすべきだと感じていますか。

減らす方がよい ・ そのまま(年 2 回)でよい ・ 増やす方がよい

質問 11. 質問 10. でそのように考えた理由があれば教えてください。

質問 12. 家庭で防災や災害について話すことはありますか。(該当するものに○)

よく話す ・ とくとき話す ・ あまり話さない ・ 全く話さない

質問 13. 防災を担うべき機関は次のうちどれだと思いますか。(最も当てはまるものに○)

行政(国や県、市など) ・ 企業 ・ NPO(自主的に活動するグループ) ・ 学校

質問 14. 防災を担うべき人は次のうち誰だと思いますか。(最も当てはまるものに○)

先生 ・ 保護者 ・ 自分たち

【表一神戸甲北高等学校で実施したアンケート回答】有効回答のみ使用しているため、各質問で合計人数が異なる。また、小数第二位を四捨五入しているため、合計が 100%にならない可能性がある。

質問 1. あなたは何年生ですか

質問 1	(人)	(%)
1 年生	179	35.3
2 年生	159	31.4
3 年生	169	33.3
合計	507	

質問 2. 居住地域を教えてください

質問 2	(人)	(%)
神戸市北区	422	84.1
神戸市兵庫区	43	8.6
神戸市長田区	15	3.0
その他	22	4.4
合計	502	

質問 3. 小中学校では 1 年に 1 回以上避難訓練がありましたか

質問 3	(人)	(%)
あった	498	98.0
なかった	4	0.8
覚えていない	6	1.2
合計	508	

質問 4. 学校で行う避難訓練は大切である

質問 4	(人)	(%)
そう思う	375	74.0
ややそう思う	117	23.1
あまりそう 思わない	11	2.2
そう思わない	4	0.8
合計	507	

質問 5. 高校生になって防災学習を行う機会は増えましたか

質問 5	(人)	(%)
増えた	69	13.6
減った	246	48.4
分からない	193	38.0
合計	508	

質問 6. 甲北高校の避難経路を知っていますか

質問 6	(人)	(%)
知っている	103	20.6
知らない	397	79.4
合計	500	

質問 7. 今「地震」が起きた場合、どのように行動すればよいか分かりますか

質問 7	(人)	(%)
分かる	381	75.7
分からない	122	24.3
合計	503	

質問 8. 今「火災」が発生した場合、どのように行動すればよいか分かりますか

質問 8	(人)	(%)
分かる	368	73.2
分からない	135	26.8
合計	503	

質問 9. 避難訓練に対するイメージはどれが当てはまりますか

質問 9	(人)	(%)
楽しい	15	3.0
学びになる	436	86.5
つまらない	28	5.6
面倒だ	25	5.0
合計	504	

質問 10. 避難訓練の回数はどうするべきだと感じていますか

質問 10	(人)	(%)
減らす方がよい	16	3.2
そのまま(年2回)でよい	372	73.8
増やす方がよい	116	23.0
合計	504	

質問 12. 家庭で防災や災害について話すことはありますか

質問 12	(人)	(%)
よく話す	25	5.0
ときどき話す	176	35.0
あまり話さない	226	45.0
全く話さない	76	15.1
合計	503	

質問 13. 防災を担うべき機関は次のうちどれだと思いますか

質問 13	(人)	(%)
行政	371	75.3
企業	19	3.9
NPO	39	8.0
学校	64	13.0
合計	493	

質問 14. 防災を担うべき人は次のうち誰だと思いますか

質問 14	(人)	(%)
先生	39	7.8
保護者	13	2.6
自分たち	445	89.5
合計	497	